

ヒューロディスの眠りの場面についての一考察 —*Sir Orfeo* から—

柳下 夏菜子

On the scene of Heurodis' sleep in *Sir Orfeo*
Kanao Yagishita

序論

Sir Orfeo に描かれる妖精の国は明るく、幸せな結末を導くものであるが、そのイメージにそぐわない場面がある¹⁾。ヒューロディスのように、現世から連れて来られてきて眠る者は多くいた。その他の者については、次のように描写されている。

Sum stode wiþouten hade,
And sum non armes nade,
And sum þurch þe bodi hadde wounde,
And sum lay wode, ybounde,
And sum armed on hors sete,
And sum astrangled as þai ete,
And sum were in water adreynt,
And sum wiþ fire al forschreynt:
Wiues þer lay on child-bedde,
Sum ded, and sum awedde
And wonder fele þer lay bisides,
Riȝt as þai slepe her vndertides;
Eche was þus in þis world ynome,
Wiþ fairi pider ycome.

(ll. 389-402)

「ある者は首なしで立っており、ある者には腕がなく、ある者は洞を貫かれた傷をもち、ある者は気がふれて縛られた状態にあり、ある者は武具を身につけ馬上にあり、ある者は食事中にのどを詰まらせ、ある者は水中で溺れ、ある者は火に焼かれて縮んでいた。また、出産の場にある女性もいた。その中には死んだ者も気がふれた者もいた。(ヒューロディスのように) 午後の時間帯に眠る者も多くいた。これらの者は皆、この世で捕らえられ、妖精によってこの国に連れて来られたのである。」

このように、ロマンス *Sir Orfeo* の妖精の国には、ギリシャ神話の暗いハデスの国とは対照的な明るさを背景にする一方で、そこに連れて来られた人々は瀕死または死の状態にある。幸福な妖精の国にいる人々であるには、ふさわしくないという解釈もある。この描写について、George Kane は次のように述べている。

Indeed no other romance conveys so strong an impression of contact with another existence older, colder and less happy than our own, sinister in the chill of its beauty, and able to 'take', that is to lay its compulsion upon mortals in their

unguarded moments.²⁾

確かに *Sir Orfeo* における妖精の国、つまり異界では、その住人が幸福からかけ離れている状態にあるということに、違和感を持たずにはいられない。しかし、瀕死の状態の人々が描かれているという理由だけで、この国や君臨する妖精の王を恐ろしく邪悪な存在であると理解すべきなのだろうか。

Sir Orfeo では、妻のヒューロディスが妖精の国に連れて行かれるが、物語の結末では、オーフェオ卿のいる現世に戻ってくる。本稿では、登場人物の中でも特にヒューロディスに焦点を当て、ヒューロディスに降りかかった出来事やその行動を追いながら論を進め、なぜ妖精の国がこのようなあり方で描かれるのか、また、この場面をどのように解釈すべきなのかについて考察していきたい。

§ 1. ヒューロディスの乱心

De King hadde a Quen of priis,
 Pat was ycleped Dame Herodis,
 De fairest leuedi for þe nones
 Pat miȝt gon on bodi and bones,
 Ful of love and godenisse,
 Ac no man may telle hir fairnise.
 (ll. 49-54)

ヒューロディスは、「王（オーフェオ卿）にはヒューロディスと呼ばれる素晴らしい王妃がありました」という表現で紹介される。ギリシャ神話においては、ヒューロディスに相当するエウリュディケは、妖精のニンフとされているが、ロマンスにおいては、王妃の生まれ等の素性については一切触れられていない。説明されているのは、「王妃はこれまでこの世に生を享けた者の誰にも匹敵しないほど“fairest”(l.51)であった」ということである。次に l.53 で“Ful of love and godenisse”「愛と善良さに溢れる」と言い換えられ、その名詞形“fairnise”(l.54)、つまり“fairness”という言葉で締めくくられている。これらの意味を総合して考えれば、この語には磨かれ尽くされ洗練された「品格」たるものが集約されており、筆舌に尽くしがたいほどであったことを示しているといえよう。しかし、“fairnise”が、実際にはどのようなものであったのかについての具体的な描写はない。口誦文学において典型的なこの表現方法は様式化表現とよばれ、ロマンスにはよく見られる。様式化表現について、多々谷有子氏は次のように述べている。

「様式化表現とは、結局のところ、彼らが主人公にふさわしい資質をすべて備えているということを伝える表象なのである。現実世界では姿形も気質も個々に異なる筈の者たちが、様式化表現一つで同質化されてしまうのである。様式化表現のフィルターにかけられた時、表現の論理は現実の常識を超越し、現実世界における個性というものは消滅してしまうのである。美しさも徳も、気品も高雅さも、すべて絶対化されるからである。」³⁾

ロマンスにおいて表現される姿の「美しさ」つまり“fairness”とは、描かれる人物の心のあり方の現れであり、人間性そのものを表現している。心の気高さは外側ににじみ出て現れ、描写されているのである。ヒューロディスの場合、文脈の流れに従っていけば、汲み取るべき真意は、「王妃としての資質を十分に備え、女性として彼女の右に出るものはおらず、完璧である」ということである。聴衆がそれぞれの感性と個性を持ち合わせていることを考慮に入れば、様式化表現によって具体性を欠くことは、個人個人の想像力にまかせた王妃像を思い描くことを可能にする。聴衆の数だけ多くの王妃像が、同時に可能になるのである。

このように非のうちどころのない女性として描かれるヒューロディスであるが、突如、変化が訪れる。

あるとき侍女とともに果樹園の外れに遊びに出掛け、緑の草地の上で眠り込んでしまう。目を覚ますと突然、大声をあげ絶叫した。オーフェオ卿は、王妃のあまりに突然の変わりように驚く。

“O lef liif, what is te
 Þat euer zete hast ben so stille,
 And now gredest wonder schille!
 Þi bodi, þat was so white ycore,
 Wip pine nailes is al totore!
 Alas, þi rode, þat was so red,
 Is al wan as pou were ded!
 And also pine fingers smale
 Beþ al blodi and al pale!
 Allas! þi louesum eyzen to
 Lokep so man dop on his fo!
 (ll. 100-110)

眠りの中でヒューロディスは夢を通じ、自分が妖精王に連れ去られる運命にあることを知る。妖精王は、ヒューロディスがいかなる手段を用いて抵抗しようとも無駄であると告げる(II. 167-72)。目を覚ますと、ヒューロディスは、金切り声をあげ、爪で白い肌をかきむしった。その指には血がまみれている。魅力的であった目はそれまでとは異なり、まるで“fo”つまり「敵」を見るかのような眼差しであった。

ヒューロディスがこのように心を乱した原因は、妖精に連れ去られることにより、オーフェオ卿と別れなければならないからであると考えられることはできる。しかし、それだけだろうか。目つきまでも、まるで「敵を見るような眼差し」であるとは、どのような意味を持つのであろうか。ロマンスにおける表現方法が、精神性そのものを表現していることを考慮に入れば、この変化は単なる外見上のものではないことは明らかである。また、一時的なものでもない。ヒューロディスは、この場面においてそれまで“fairmise”に象徴されていた美徳を失いつつあるのではないだろうか。ヒューロディスに備わる、本質が失われ行き、変化して行くことの現れであると考えるのが妥当であろう。ヒューロディスに備わる美しさの変質したという意味ではない。ヒューロディスの精神的な美しさを支えている精神基盤そのものが失われつつあるのではないだろうか。この世における価値のあり方を超え、すでに次元の異なる世界に足を踏み入れているのである。Derek Pearsall は次のように述べている。

What ever has happened to Heurodis has happened irrevocably; she is already a different person. Orfeo, in one of the formal rhetorical sets of antitheses for which the poem is notable (102-12), contrast her past self with her present self, itemizing the superficial manifestations of a change……⁴⁾

どのようなことが起こったにせよ、ひとたび起きた事を取り消すことはできない。ただ、時の流れとともに前に突き進む以外にはありえない。ヒューロディスの場合も、起きた出来事を受け入れ、次の一步を踏み出す以外に道はない。その一步とは、ヒューロディスはすでにそれまでの人物ではなく、別人であるという事実を、オーフェオ卿もヒューロディス自身も受け入れねばならないということであろう。こうしてヒューロディスはオーフェオ卿がいる世界から姿を消すことになる。オーフェオ卿やその民が受けとめるべき現実とは、ヒューロディスとの永遠の別れである。

ヒューロディスは妖精に連れ去られる前日、自分が変わりゆくことを止めることができず、「お別れしなくてはなりません。行かねばなりません。」と言っている⁵⁾。ここでのヒューロディスの変質は、人間

から妖精になることを表している。かぐや姫が月の人に戻り行くとき、育ての親との別れを悲しみながらも、やはり月の人に戻っていくのがどこか自然であるように、ヒューロディスもオーフェオ卿と共に暮らした世界から自我の変質を経て、妖精の国に向かう。ヒューロディスの精神的錯乱は、ヒューロディスが人間から妖精になるというこの変化を聴衆に知らせるために起きていと考えられる。

ところで、妖精つまり *fairy* の語源は、*O.E.D.*によれば、[a. OF. *faerie, faierie* (mod. F. *féerie*), f. OF. *fae* (mod. F. *fee*) *FAY sb. 2*]と書かれている。これに従い、“*fay, sb. 2*”をみれば、[ad. OF. *fae, faie* (Fr. *fee*) = Pr. And Pg. *fada*, Sp. *hada*, It. *fata* — Com. Rom. *fata* fem. sing., f. L. *fata* the Fates, pl. of *fatum* FATE]と説明がある⁵⁾。つまり *O. E. D.* によれば、“*fairy*”はラテン語の“*fatum*”に由来している。意味は「運命」である。運命は受け入れねばならない。*Sir Orfeo*では、「別れは運命的にやってくる」ことを説明しているのかもしれない。

§ 2. 妖精の国

ヒューロディスは妖精の国に行く事を決して望んでいないが、妖精王が夢の中に現れた時点で、すでに心は妖精の国に向かっているように思われる。Pearsall は次のように続けている。

Heurodis is terrified, but her terror seems to be not of the fairy king and the abduction but of the return to normality. She acknowledges, though she is now 'other', what her former life was, but she cannot wait to get away from it. When she speaks of the fairy king, his company, his kingdom, it is of an experience of transcending beauty that she speaks. Her attempts to resist (140, 154) are as if they were non-existent, for in truth she is already 'of another mind'.⁷⁾

ヒューロディスは、夢の中で会った妖精王や妖精の国について説明し、「とても美しい」と感嘆し、その国の荘厳さと魅力について述べている。このようなヒューロディスの言動からは、まるでヒューロディスがすでに妖精の国の一員になっているかのような印象を受ける。Pearsall が指摘するように、「ヒューロディスは妖精王や妖精の国に連れ去られ行くことにではなく、自分が常態に戻り行くことの方に、恐怖を感じているように思われる」。常態とは、元の妖精の姿である。つまり、ヒューロディスは自分自身が変わり行くことに恐怖を感じる一方で、この世に来る以前の状態に、自然と戻り行く状況にあることを自覚しつつあると考えられる。

ヒューロディスが夢で見た妖精の国とは、次のようなものである。

Y no seiȝe neuer ȝete bifore
 So fair creatours ycore:
 Þe King hadde a croun on hed:
 It nas of siluer no of gold red,
 Ac it was of a precious ston:
 As briȝt þe sonne it schon.
 And as son as he to me cam,
 Wold ich, nold ich, he me nam
 And made me wiþ him ride
 Opon a palfray bi his side
 And brouȝt me to his palays,
 Wele atird in ich ways,
 And schewed me castels and tours,
 Riuiers, forestes, friþ wiþ flours,
 And his riche stedes ichon.

(ll.145-159)

「私はこれまでこんなにも美しい人々を見たことがありません。妖精王は王冠を戴いていました。それは一つの宝石でできており、まるで太陽のように輝いていました。」「宮殿はすべての点において非常に見事な造りになっていました」という言葉でヒューロディスは妖精の国を描写している。後にオーフェオ卿はヒューロディスを捜し求めて、この妖精の国を訪れることになるが、その際にはさらに詳しい描写がなされている。まばゆいほどの明るさを説明するために ‘crystal’、‘gold’、‘precious stones’ などの語に喚起されるイメージが使われ、それぞれの光の特徴が反映されている。宝石の美しさとその価値は、格別である。「宝石のような」という比喻表現は人々の心を魅了し、届きたい高尚な価値を認識させる。視覚的にはまぶしい光を、そして心には最高の美德を読者に伝えている。つまりここに描かれているのは高価なものから喚起されるイメージであり、そのイメージを通して妖精の国の価値の高さを読者に伝えている⁸⁾。ヒューロディスはこうした美しさに魅了され、妖精の国に自然と引き込まれたのではないだろうか。

先にも述べたように、ロマンスは徳そのものを、物や外観に投影することにより表現する。その特徴を考慮に入れて妖精王をみつめなおせば、その描写から、妖精たちには多く徳が備わっていると解釈できる。つまり、オーフェオ卿と同様に善良で高貴な人物であることが示されている。こちらの世界と同等なあり方で、妖精の世界も存在するのである。こちらの世界に価値観があるのと同じように、妖精の国にもその国特有の価値観があることを暗示している。

Sir Orfeo は、一見したところ、ll. 389-402 が楽しい妖精の国のイメージに当てはまらないため、不可解であると感じる読者もいる。その結果、妖精王や王妃は恐ろしい存在に思えがちである。その理由の一つとしては、こちら側の世界の価値基準が妖精の国に当てはまらないため、説明がつかないということが挙げられよう。

§ 3. ll.190-91 “oway ytuizt”, “ynome”について

And Orfeo hap his armes ynome,
 And wele ten hundred kniztes wiþ him,
 Ich yarmed stout and grim;
 And wiþ þe Quen wenten he
 Riȝt vnto þat ympe-tre.
 Þai made scheltrom in ich a side
 And sayd þai wold þere abide,
 And dye þer euerichon,
 Er þe Quen schuld fram hem gon.
 Ac ȝete amiddes hem ful riȝt
 Þe Quen was oway ytuizt,
 Wiþ fairi forþ ynome,
 Men wist neuer wher sche was bicomē.
 (ll. 180-192)

ヒューロディスが夢を見た次の日に、妖精王はヒューロディスを連れ去ると告げた。オーフェオ卿は妃を連れ去られまいとし、城中に強固な守備を固める。こうした努力にもかかわらず、ヒューロディスは、瞬間に連れ去られ、妖精の国に行くことになる。その様子は、“oway ytuizt”, “ynome”、つまり “twitched away”, “taken” という言葉で表現されている。ギリシャ神話においては、エウリュディケは毒蛇に噛まれることで身体を失って死に至り、ハデスに行った。この場合は “dead” である。妖精の国と

ハデスという、一般的には相容れないイメージを想起させる二つの世界の類似性について Drena Allen は、次のように述べている⁹⁾。

To us these lines may seem at the worst nonsensical, at the best a clumsy attempt to reconcile the irreconcilable mythologies of Hades and fairyland:¹⁰⁾ but less than a hundred years ago an Irish or a Scottish countryman would have recognized in them the echo of his own convictions:

Very few die at all, most are *taken*. When a man dies, he does not die at all, but the *daoine maithe* take him away. No-one dies, but the *daoine maithe* take him away, and leave something else in his place. Not one in twenty dies a true death, they all pass into another life.¹¹⁾

“these lines”とはll.387-88、“Of folk þat were pider ybrouȝt / And pouȝt, dede and nare nouȝt”を指しており、「妖精の国に連れて来られた人々は死んでいるように思われるが、死んではない」という内容である。現代人にとってみれば、なぜ、首の無い者や腕の無い者、胴を貫かれた傷をもつ者などが「死んでいるように思われるが実は死んでいない」状態でいられるのかと考えてしまい、この物語は未熟であると考えがちになる。しかし、Allen は“an Irish or a Scottish countryman”による「死ぬ人はほとんどいない。多くは連れ去られるのだ。死んでしまうということではなく、“*daoine maithe*”つまり「善良な人々」によって連れ去られて別の生命になるのだ」という発言をとりあげ、過去 100 年以内にはまだ同じ思想を持っていた人がいたという例を挙げている。Allen は、ヒューロディスがオーフェオ卿から連れ去られたことは、これらの話し手が表現するところのものに他ならないと言っている。

つまり、ヒューロディスが連れ去られたことは、現実的に「死」を意味している。侍女と共にあった果樹園では「眠りに陥った」のであるが、それは「死」の前兆である。眠りも永遠であれば「永眠」という。ここでいう「連れ去られる」、つまり“*oway ytuiȝt*”, “*ynome*”は「死ぬ」ということの婉曲表現である。

結局のところ、*Sir Orfeo* のヒューロディスは、実質的にはギリシャ神話のエウリュディケと同じである。ギリシャ神話の場合は、「毒蛇に噛まれる」という、誰もが納得できる死因により身体そのものを失うことによって、明らかに死を説明している。しかし、ヒューロディスの場合は身体に異変が生じた後、心身共に連れ去られる。この場合、ギリシャ神話のように現実世界に戻れないエウリュディケの場合とは異なる。ロマンスの *Sir Orfeo* では、全てを失う「死」ではないため、“*oway ytuiȝt*”, “*ynome*”なのであろう。ヒューロディスの身に降りかかった一連の出来事は、“an Irish or a Scottish countryman”が述べるような、魂の移動である。

§ 4 ケルト神話『エティンの求婚』との類似性

ケルト人は、死者が生まれ変わることを信じていたと言われている。Caesar は *The Gallic War* の中でケルト人について次のように言っている。

The cardinal doctrine which they seek to teach is that souls do not die, but after death pass from one to another: and this belief, as the fear of death is thereby cast aside, they hold to be the greatest incentive to valour.¹²⁾

ドルイド神官たちは、「魂は滅ぶことがなく、身体を失うと次から次へと別の生命に宿るという教えなので、戦闘において死を恐れることがなく、とても勇敢であった」と述べている。こうしたケルト人の死生観は、物語の中にあらわれている。ケルトの文学の『エティンの求婚』という神話は、*Sir Orfeo* との

間に類似性があるとされている。神話の内容は次のようなものである。

「ミディールにはフォームナハという名の妻がおりました。その頃、エティンという名の美しい姫がおりました。ミディールはエティンに恋をし、妻に迎えることにしました。怒ったフォームナハは、魔法の杖でエティンを打ち、水たまりに変えてしまいました。水たまりは毛虫に変わり、やがて美しい蝶になりました。蝶はいつもミディールの近くを飛んでいました。ミディールは、それが姿を消したエティンであることを知りました。フォームナハは、エティンがまだ近くにいることを知ると怒り、魔法の杖でエティンを吹き飛ばしてしまいました。エティンはその後、長い間、一人でさまよわねばなりませんでした。

ある時、一陣の風が吹き、エティンは人々の宴の場に吹き飛ばされました。そして、エタアの妻の杯の中に落ち、エタアに飲み込まれ、人間の娘として生まれました。この時、ミディールの妖精の国に生まれてから 1012 年の歳月が流れていました。

エオカイドはアイルランドの王様で、妻にふさわしい女性を探していました。彼はエティンに求婚し、二人は結婚しました。

ある日、ミディールはエティンを見つけ、エオカイドの弟のアーリルになりすまして近づきました。ある時、ミディールは自分の本当の姿を現し、以前エティンが自分の妻であったことを話しました。そして、以前の妖精の国に戻ろうと言いました。エティンはミディールのことを覚えていませんでしたが、夫のエオカイドの許可があれば、ミディールと一緒にいっても良いと言いました。

ミディールはエオカイドとチェスをして勝つと、エティンを渡すようにと要求しました。エオカイドは一月待ってほしいと頼みました。その間、家中を最強の戦士たちに守らせ、エティンが決して連れ去られることのないように準備を整えました。しかし、ミディールはエティンの手を取り、彼らは白鳥になって、空に飛び立って去ってしまいました。」¹³⁾

エオカイドをオーフェオ卿、ミディールを妖精王、エティンをヒューロディスに当てはめれば、この神話においては、妖精王の方がオーフェオ卿より先に、ヒューロディスと結婚していたことになる。つまり『エティンの求婚』の視点から *Sir Orfeo* を再考してみれば、妖精王はオーフェオ卿からヒューロディスを連れ去ったのではなく、自分の妻を取り戻したにすぎない。ヒューロディスは、もともと妖精の国の人であったが、何らかの原因で、オーフェオ卿のいる人間世界に生まれ、オーフェオ卿と結婚することになったわけである。その後、妖精王がヒューロディスをみつけて連れ戻したという見方ができる。ケルト神話の『エティンの求婚』は、妖精側から語られている。ロマンスの *Sir Orfeo* は、人間の視点から物語が語られている。どちらもヒューロディス及びエティンを取り戻そうとしている。この背景になっている思想は、魂が生まれ変わるというケルト人の死生観である。

『エティンの求婚』においては、エティンは蝶に生まれ変わり、人間の娘に生まれ変わった。この神話においては、次の生命に生まれ変わるときのプロセスは描かれていない。しかし、*Sir Orfeo* の ll. 389-402 には、魂が生まれ変わるプロセスの中で、前の命が消え行く姿がそのまま描かれているのではないだろうか。

結論

これまでヒューロディスの眠りの場面に焦点を当て、*Sir Orfeo* をみてきた。ヒューロディスが連れ去られていった先は、ケルト的な妖精の国であり、目を見張るようなまばゆい宝石の光に包まれ、美德が象徴された美しい世界であった。しかし、そこに連れて来られた者は、無惨な瀕死状態にあった。夢を与えるはずの妖精の国に、人々がそのように描かれているのは一見、異様に思われる。しかし、ケルト人の死生観を考慮に入れて *Sir Orfeo* の妖精の国をみてみれば、その者たちは、次の生命に生まれ変わるために、この妖精の国に連れて来られたという肯定的な考え方が可能になる。

ll. 389-402 は、瀕死の状態にある恐ろしい場面を描いているのではない。ケルト人は、魂は生まれ変わると信じていた。その思想が物語に反映されているのである。戦闘または不慮の事故等で善良な人達

がこの世で命を失ったところに、徳高き妖精つまり“*daoine maithe*”「善良な人々」が、その人々を妖精の国に連れ去る。妖精のエティンが人間のエティンとして再び生まれたように、再び人間世界に生まれる新たな未来が今にも与えられようとしている場面ではないだろうか。

Sir Orfeo の妖精の国では、一つの魂が別の新しい命に生まれ変わる直前の姿が描かれている。そのように解釈すれば、この場面は決して、この物語にそぐわないということはない。ケルト人の死生観を映し出している、自然な場面であるといえよう。

註

- 1) テキストとして Walter Hoyt French, & C. B. Hale, eds., *Middle English Metrical Romances*. 2 vols bound as one. (New York: Russell and Russell, 1930; rpt., 1964) を使用。本文中で取り上げている引用はこの版に拠る。
- 2) George Kane, *Middle English Literature*, (London: Methuen, 1951), p. 81.
- 3) 多ヶ谷有子『星を求むる蛾の想い ―中世英文学における至福願望―』(八千代出版、1996.) p.116.
- 4) Derek Pearsall, “Madness in *Sir Orfeo*”, p. 53.
- 5) James A. H. Murray, Henry Bradley, W. A. Craigie, C. T. Onions, eds. *The Oxford English Dictionary*: 2nd edn. (Oxford: Clarendon Press, 1989, rpt., 1998).
- 6) ll.123-24 に “Ac now we mot delen ato, / Do þi best, for y mot go!” とある。
- 7) Derek Pearsall, “Madness in *Sir Orfeo*”, Jennifer Fellows, Rosalind Field, Gillian Rogers and Judith Weiss eds., *Romance Reading on the Book —Essays on Medieval Narrative, Presented to Maldwyn Mills—*, (Cardiff: University of Wales Press, 1996), p. 53.
- 8) 拙稿「ME ロマンズ *Sir Orfeo* における「異界」について」『OLIVA』第六号(関東学院大学英語英米文学会、1999.) pp.41-44.
- 9) Dorena Allen, “Orpheus and Orfeo: The Dead and the Taken.” *Medium Aevum*. 33. (1964), p. 104.
- 10) Allen による note: “As is suggested by Constance Davies, *MLR* LVI, 164”.
- 11) Allen による note: “Quoted from material in the possession of the Irish Folklore Commission, Dublin, by kind permission of Professor J. Delargy. These remarks were recorded in this century by collectors working in Gaelic-speaking Ireland.”
- 12) Caesar, *The Gallic War*: The Loeb Classical Library. tr. by H. J. Edwards (London: William Heinemann Ltd. 1917, rpt., 1958), p. 339.
- 13) この物語には、いくつかのバージョンがある。本稿においては物語のあらすじのみを必要としており、細部にはこだわらない。参考文献としては、Jeffrey Gantz の *Early Irish Myths and Sagas*, pp. 39-59 のほか、井村君江氏の『ケルトの神話』、フランク・ディレイニー氏の『ケルト—生きている神話』に拠った。

参考文献

- Allen, Dorena. “Orpheus and Orfeo: The Dead and the Taken.” *Medium Aevum*. 33. (1964): 103-11.
- Bliss, A. J. ed., *Sir Orfeo*. London: Oxford Univ. P., 1954, rpt., 1961.
- Boethius. *The Theological Tractates, The Consolation of Philosophy*: tr. by H. F. Stewart and E. K. Rand. London: William Heinemann Ltd., 1918, rpt., 1962.
- Briggs, K. M. “The Fairies and the Realms of the Dead.” *Folklore* 81., 1970, pp. 81-96.
- Caesar. *The Gallic War*: The Loeb Classical Library. tr. by H. J. Edwards. London: William

- Heinemann, 1917, rpt., 1958.
- French, Walter Hoyt & C. B. Hale, eds., *Middle English Metrical Romances*. 2vols bound as One. New York: Russell and Russel, 1930; rpt., 1964.
- Gantz, Jeffrey. *Early Irish Myths and Sagas*. London: Penguin Books, 1981.
- Graves, Robert. *The Greek Myths*. Complete Edition. London: Penguin Books, 1955, rpt., 1992.
- Green, Miranda Jane. *Celtic Myths*. London: British Museum Press, 1993.
- Kane, George. *Middle English Literature*. London: Methuen, 1951.
- Loomis, Roger Sherman. *Celtic Myth and Arthurian Romance*. New York: Haskell House Publishers, 1927.
- Murray, James A. H., Henry Bradley, W. A. Craigie, C. T. Onions, eds. *The Oxford English Dictionary*. 2nd edn. Oxford: Clarendon Press, 1989, rpt., 1998.
- Ovid. *Metamorphoses*. The Loeb Classical Library. 3 vols. vol 2. tr. by Frank Justus Miller. London: William Heinemann Ltd. 1916, rpt., 1958.
- Pearsall, Derek. "Madness in *Sir Orfeo*". Jennifer Fellows, Rosalind Field, Gillian Rogers and Judith Weiss eds., *Romance Reading on the Book — Essays on Medieval Narrative, Presented to Maldwyn Mills* —. Cardiff: University of Wales Press, 1996.
- Rumble, Thomas C., ed., *The Breton Lays in Middle English*. Detroit: Wayne State Univ. P., 1965.
- Scholes, Robert & R. Kellogg. *The Nature of Narrative*. London: Oxford Univ. P., 1966, rpt., 1976.
- Speed, Diane. *Medieval English Romances*. Durham: Durham Medieval Text, 1993.
- Virgil. *The Eclogues · The Georgics*. tr. by C. Day Lewis. London: Oxford Univ. P., 1983.

井村君江『ケルトの神話』筑摩書房、1983, rpt., 1993.

多ヶ谷有子『星を求むる蛾の想い —中世英文学における至福願望—』八千代出版、1996.

フランク・ディレイニー『ケルト— 生きている神話—』森野聡子訳、創元社、1993, rpt., 1994.

柳下夏菜子「ME ロマンズ *Sir Orfeo*における「異界」について」『OLIVA』第六号（関東学院大学 英語英米文学会、1999.）pp.37-55.

「受理年月日 2004 年9月30日」

